

＜幼稚園教育＞

人とかかわる力が育つための援助の工夫 —日々の遊びと保育参加を通して—

与那原町立与那原幼稚園教頭 照 屋 信 子

内容要約

人とかかわる力が育つために幼児の行動の様子から内面理解を行い適切な援助をしたり，保育参加を通して幼児が親，地域の人々と触れ合う環境の工夫を行ってきた。その結果，友達のよさに気づいたり，自分の感情や意志を伝えたり人とかかわることの楽しさや喜びを味わう等，人とかかわる力の育ちが見られた。

【キーワード】 人とかかわる力 保育参加 人々との触れ合い 教師の援助 環境の工夫

目 次

I テーマ設定の理由	1
II 研究構想図	2
III 研究内容	2
1 幼児期における人とのかかわり	2
2 人とかかわる力が育つ過程	3
3 教師の援助	4
4 人とかかわる力を育てる保育参加年間計画	6
IV 保育実践	7
1 活動名	7
2 活動設定の理由	7
3 保育の目標	7
4 保育の視点	7
5 保育実践の展開	7
V 研究全体の考察	9
1 日々の遊びの場面から内面理解を行い，人とかかわる力が育つ援助	9
2 保育参加の中で家庭，地域の人々と触れ合い，人とかかわる力が育つための環境の工夫	10
VI 研究の成果と今後の課題	10
1 研究の成果	10
2 今後の課題	10

＜幼稚園教育＞

人とかかわる力が育つための援助の工夫 —日々の遊びと保育参加を通して—

与那原町立与那原幼稚園教頭 照 屋 信 子

I テーマ設定の理由

社会環境が目まぐるしく変化している今日、幼児を取り巻く環境も大きく変化している。核家族化、少子化により、兄弟姉妹や祖父母との触れ合いが少なくなっている。また、テレビやファミコンなど室内での一人遊びが増大し、地域における異年齢集団の遊びが減少し人とかかわりも希薄になっている。

幼稚園教育の目標の中で、幼児期における教育は、家庭との連携を図りながら、生涯にわたる人間形成の基礎を培うために大切なものであり、幼稚園は、幼稚園教育の基本に基づいて展開される幼稚園生活を通して生きる力の基礎を育成するよう示している。なかでも様々な人とかかわりの中で、温かい人間関係を培っていくことが大切である。

これまでの保育を振り返ってみると、一人ぼつんと立っている子に、早く友達とかかわってほしいという思いから、先走った援助をしたり、幼児同士のトラブルの場を成長の機会と捉えることができて、どういう言葉かけをし、対応すればよいのか戸惑っている教師の姿を見ることがある。日々の幼児の表情や行動の様子から担任が援助を必要とした時、チームの一員としてかかわってはきたが十分でなかったことを痛感している。本来、幼児は様々な良さや可能性に満ち溢れ、友達と仲良くなりたい、楽しく遊びたいという思いをもっている。幼児に人とかかわる力を育てるためには、全職員で幼児の表情やつぶやき、行動の様子など内面理解し適切な言葉かけやかかわり方など教師援助が重要である。また、人とかかわる力を育てる上で保育参加のあり方も改善し工夫する必要がある。

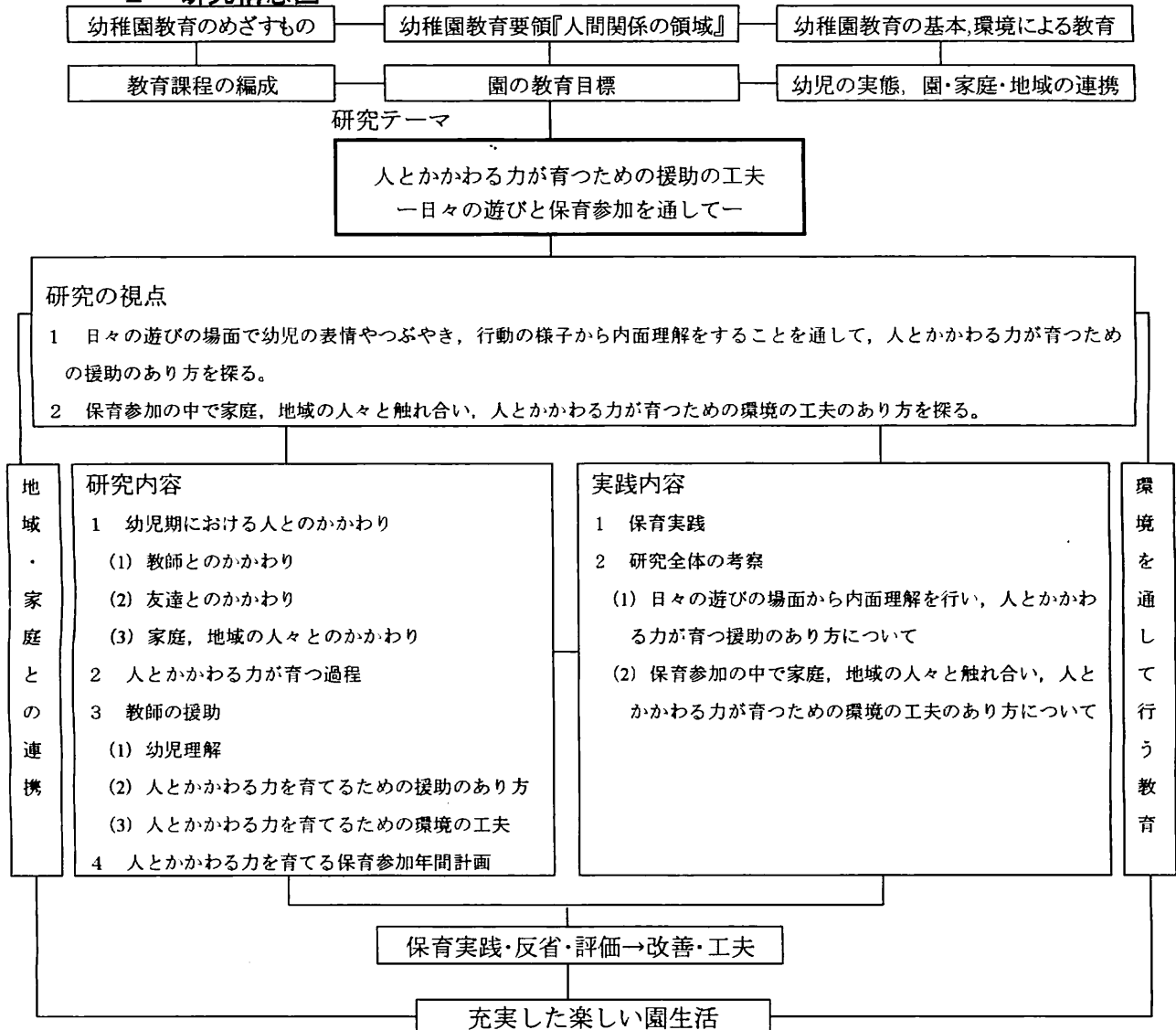
保育参加についても、これまではそばから見るだけの形式が多かったように思う。共に育ち合う園生活を願う時、幼稚園において、親、地域の人たちと積極的に触れたり、遊んだりする体験をもつことが人とかかわる力を育てる上で大切である。親、地域の人たちとかかわりを通して、人間は一人だけで独立して生きているのではなく、周囲の人たちとかかわり合い、支え合っているのだということを実感させることができるからである。そのためには、保育参加の中で、親、地域の人々を幼稚園に招いたり、高齢者福祉施設を訪問して交流するなど、触れ合う活動を工夫していくことが大切である。

そこで、幼児期における人とかかわりについて考え、教師がどのように幼児を理解し、人とかかわる力が育つための援助をしていけばよいのか、援助のあり方を探る。また、保育参加を通して人とかかわる力が育つための環境構成の工夫を探りたいと考え本テーマを設定した。

＜研究の視点＞

- 1 日々の遊びの場面で幼児の表情やつぶやき、行動の様子から内面理解をすることを通して、人とかかわる力が育つための援助のあり方を探る。
- 2 保育参加の中で家庭、地域の人々と触れ合い、人とかかわる力が育つための環境の工夫のあり方を探る。

Ⅱ 研究構想図



Ⅲ 研究内容

1 幼児期における人とのかかわり

(1) 教師とのかかわり

幼児にとって教師は家庭以外で生活する初めての大人であり, 教師の生活心情や態度(幼児に接する時の印象, 言葉, 動き, 感じる心)の一つ一つが人とかかわる力を獲得していくうえで幼児の発達に大きく影響を与える。

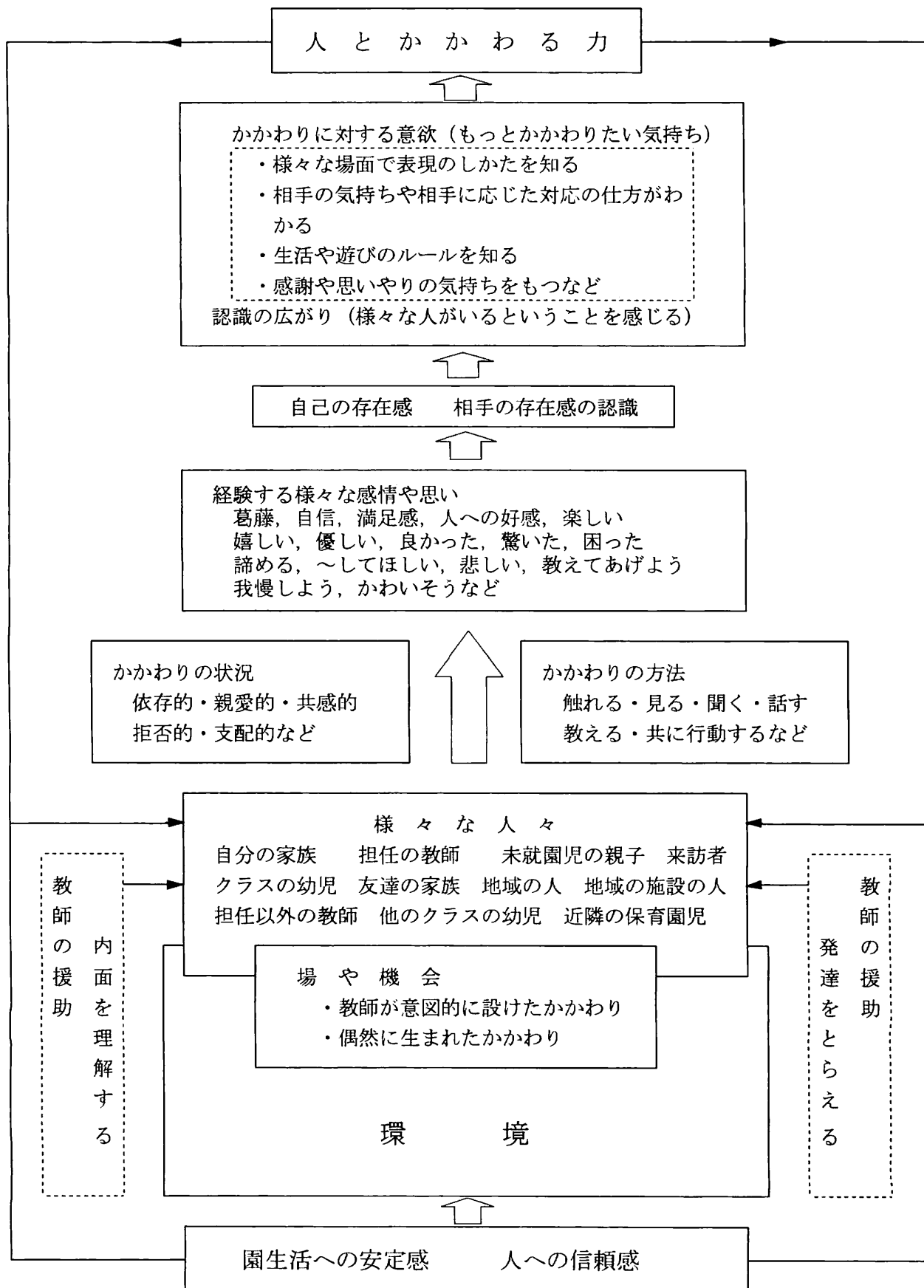
(2) 友達とのかかわり

発達状況が同じ年齢の仲間と生活する中で, 仲良くしたり時には喧嘩や衝突, 葛藤を経験する。相手の思いを受け入れたり譲ったりと自己の存在感や他者への思いやり, 仲間意識, 集団への参加意識などの社会性が発達してくる。仲間と生活を共にすることで刺激を受けたり影響し合ったりして, 興味や関心を広げ経験を豊かにしていく中で自己中心性から脱し, 相互の感情的な結びつきをも形成していく。

(3) 家庭・地域の人々とのかかわり

幼児の生活は家庭, 地域社会, 幼稚園と連続的に営まれている。幼児は家族の一員として家族と生活を共にしながら基本的な生活習慣や人とのかかわりの基本的な在り方を学んでいく。幼児にとって地域の生活は異年齢で遊ぶ集団があったり, 隣組活動やお年寄りと触れ合う機会があったりと, 家庭や園生活では得ることのできない多様な人とのかかわりが経験できる場である。

2 人とかわる力が育つ過程



3 教師の援助

(1) 幼児理解

幼児を理解するとは、一人一人の幼児と触れ合いながら、幼児の表出行動（つぶやき、表情、しぐさ、行動の様子）から、その幼児のもっている良さや可能性、発達する姿を受け止めながら深い幼児理解をすることから始まる。教師は幼児と生活を共にしながら、その幼児が今何に興味を持っているか、どのような経験が必要なのか等を捉え続けていかなければならない。その為には幼児の内面を推し量ってみることや心の揺れ動きに添っていかうとする教師の姿勢が大切である。

① 行動、活動の意味を理解する

一人一人の幼児にとって、活動がどんな意味をもっているのかを理解するためには、教師が幼児と生活を共にしながら幼児と同じ行動をとってみたいと同じ高さから物を見たりしてなぜこうするのか、何に興味があるのか等を感じ取っていかなければならない。目の前に起こる活動の流れだけを追うのではなく、周囲の状況や前後のつながり等と関連づけて考えてみることで、その幼児の心の動きや活動の意味が理解できるようになる。

② 一人一人の良さや持ち味を捉える

教師が幼児の育ちつつある面や良さに目を向けていくと、自然にかかわり方が温かいものになりその幼児の行動を信頼して見守ることができるようになる。幼児も自分に好意をもって温かい目で見守ってくれる教師との生活では、安心して自分らしい動きができるし様々な物事への興味や関心が広がり自分から何かをやらうとする意欲が高まってくると思われる。良さを捉える目をもつために①様々な幼児の姿を発達していく姿として捉えること②その幼児の持ち味をみつけて大切にすること③教師自身の物の見方をプラス方向に変えていくことが必要になってくる。

③ 共感的に理解する

外に表れている外面的な行動だけでなく、子どもなりの発見や感動、工夫や好奇心、意欲や充実感、イメージなど内面の心の動きや、乱暴する、泣く、しょんぼりしているなどマイナスの行動として受けとられがちなものに対しても幼児の立場に立ち、温かく共感的に理解することで幼児は自己を表現し発揮していくようになる。

④ 教師間の共通理解を図る

適切な幼児理解は教師一人でできるものではなく、解釈や見方が独善的にならないためにも、事例をもとに教師間でカンファレンスする必要がある。日々の園生活のなかで図1のような過程を繰り返しながら保育を実践することにより、一人一人の幼児への理解が深められていくものとする。

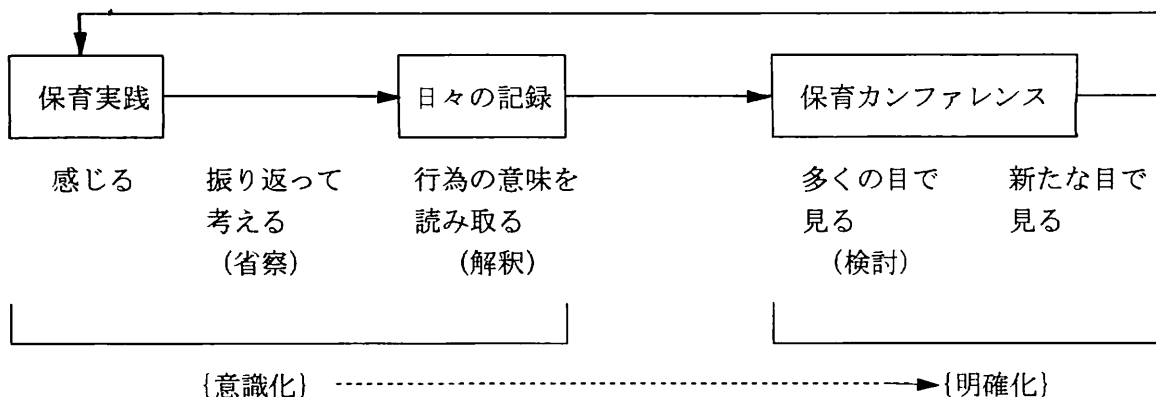


図1 幼児を理解していく過程

⑤ 家庭との連携を生み出す

幼児の持ち味を理解し、それを十分に発揮してもらうために教師と保護者が相互に情報を交換し、相互理解を図っていくことで園生活と家庭生活が循環性をもてるようになり、一人一人に応じた保育が展開されるようになる。

(2) 人とかかわる力を育てるための援助のあり方

日々の実践を通して、人とかかわる力を育てるための具体的な援助のあり方を次のように捉えた。

- ① 幼児一人一人にあった言葉かけをし、一緒に遊んだりしながら安心して生活できるように十分に信頼関係を築く。
- ② 自分の気持ちを相手にわかるように話すことに気づかせる。
- ③ 自分の思いを通そうとすることで起こるトラブルでは、思いを受け止めながら気持ちを伝えるパイプ役になる。
- ④ 衝突する場面では、なるべく自分達で解決できるように見守ったり、幼児達に任せながら必要に応じてかかわっていく。
- ⑤ 幼児同士のかかわりをよく観察し、よりよい友達関係ができるように援助する。
- ⑥ 幼児同士のかかわりを大切にし、一緒に過ごす楽しさが味わえるようにする。
- ⑦ 友達と一緒に心ゆくまで遊べるような時間と場を保障する。
- ⑧ 家庭調査票、家庭訪問、個人面談などから個々の幼児の実態を把握し、手だてを考える。
- ⑨ 基本的な生活習慣や相手の話を聞く態度、人への接し方等、教師がごく自然に生活態度として実践し、モデルとなるようにする。

(3) 人とかかわる力を育てるための環境の工夫

環境には、人的・物的環境の両面があり、固定的なものではなくこの両面が相互に絡み合って様々な状況でつくり出すことであるといわれている。そこで、人とかかわる力を育てるため、次のような工夫を行う。

- ① 幼児が十分に交流できる環境構成
 - ・友達への関心やかかわり合うきっかけをしっかりとらえる。
 - ・学年や組を越えて、いろいろな幼児同士の交流できるようにする。
 - ・一緒に遊びたくなるような遊具や素材があること。
- ② 場や空間の構成
 - ・活動の内容や友達の人数によって求める場や空間の位置や広さの工夫をする。
 - ・体を思いきり動かして展開していける場や空間の工夫をする。
 - ・じっくり取り組める場や空間を生み出す。
 - ・幼児が友達と十分に遊び込める環境の工夫をする。
- ③ 時間を環境としての活用
 - ・個々で取り組める時間や集団で取り組める時間などを工夫をする。
- ④ 幼児のイメージを豊かにする環境の工夫
 - ・興味をもつきっかけとなる友達の動きを参考にさせたり、刺激を与える本や歌などの教材を準備する。
 - ・イメージを先どりするのではなく今のイメージを共感して、十分に楽しませること。
 - ・新しさをつぎつぎと提示することではなく今のイメージを十分に堪能させる。
- ⑤ 幼児がのびのびと表現する環境の工夫
 - ・相手が自分を受け入れてくれると実感できる環境構成
 - ・環境を自在に変えたり多様な環境が生まれるように柔軟性に構成する。

4 人とかわる力を育てる保育参加年間計画

- (1) ねらい 幼稚園・家庭・地域の人々と連携を図ることによって、幼児の成長発達に必要な、人とかわる力を身に付ける。
- (2) 留意点・幼児が主体的に楽しく活動できるようにする。
- ・教育的価値を十分検討し、適切なものを精選し幼児の負担にならないようにする。
 - ・行事においては、事前に園だよりやクラスだよりで日程や内容などを早めに知らせる。
 - ・保護者が出席できない場合はその日の幼児の様子などを連絡する。

月	保育参加	対 象	ねらい	教師の援助	環境の工夫
5	親子交通安全指導	保護者 地域の人々 警察官	親子で交通安全のきまりを知る	交通安全のきまりが守れるように地域にもお願いする	現場で実施する (信号、交差点)
6	講話 竹馬づくり	保護者 地域の人々	平和の大切さや命の尊さを知る 竹馬づくりをして触れ合い楽しむ	しつとりと話しが聞ける雰囲気づくりをする 場の広さや安全面に配慮する	本・歌 場の工夫 場の広さ
7	講話 網曳資料館見学	保護者 地域の人々	自分の地域に興味、関心を持ち 網曳資料館を期待をもって見学する	網曳の由来の話を聞くことが出来るように援助し、網曳資料館も期待を持って見学する	網曳資料館に実際に行き伝統文化に触れる
9	親子美化作業	保護者	みんなで協力して園庭をきれいに にする	保護者の作業を見て気づかせたり感動させたりする 安全面に配慮する	作業道具は取り やすいようにし ておく
	おじいちゃん おばあちゃんとの つどい 大正琴サークル との交流	祖父母 保護者 地域の人々	祖父母への感謝の心、思いやり の心を育てる 地域の人々とかかわりを通して 相手を思いやり親しみや感謝 の気持ちを持たせる	祖父母や地域の人々に感謝の 気持ちやお礼の言葉が言える ようにする	一緒に遊べる遊 具を準備する (こま、おてだ ま、折り紙)
11	お楽しみ会	保護者	保護者の演技を見て生活発表会 に意欲を持たせる	おもしろかったこと、感動し たこと、自分達もやってみた いという思いが言える	リラックスして 見る場づくりを する
12	友達、保護者と一緒 に遊ぶ 親子花づくり	保護者	自分や友達のよさに気づき、保 護者と一緒に遊ぶ楽しさを味わ う 花づくりを通して親子の触れ合 いをもたせる	発表した後、皆で楽しく遊ぶ ことが出来るようにする。 親子で花の苗が植えることが できる	集団活動・グル ープ・ゲームな ど
1	学力向上実践発表会	保護者 地域の人々	発表を聞く場で望ましい習慣や 態度を身に付ける	幼児も楽しく話しが聞けるよ うに写真やスライドを使い興 味を持たせるようにする	スライド、写真 を準備する。 準備や片付けが 出来るようにし ておく
2	親子美化作業	保護者	親子で美化作業を楽しみ、みん なと働くことの充実感を味わう	みんなで力を合わせて幼稚園 をきれいにしよう声かけを する。 全体の場合や個々の場 で見守り認める	作業道具は取り やすいようにし ておく

IV 保育実践

1 活動名

自分や友達のよさに気づき、保護者と一緒に遊ぶ楽しさを味わう。

2 活動設定の理由

(1) 教材観

幼児は自分が親や周囲の人々に温かく見守られている安心感から、人に対する信頼感をもつものと捉える。

家族には、なんでも話せる幼児になってほしいと思い、その教材を取り上げることにした。

幼児から母親の「好きなところ」を引き出すため、絵本「せんたくかあちゃん」の読み聞かせを行なった。なんでも受け入れてくれ、てきぱき仕事をこなす理想のおかあさん像から、イメージをもたせ、おかあさんの「好きなところ」を聞いていくことにした。

保護者には日頃感じている「我が子のよさ」を書いてもらい準備した。

(2) 幼児観（省略）

(3) 指導観

保育参加の中で、幼児はおかあさんの「好きなところ」をみんなの前で発表することにより、自信や望ましい態度が身に付いていく。保護者も幼児からの発表を聞くことにより信頼関係がより築かれていく。自分の子どもだけでなく、他の幼児の発表や他の親の子どもへのかかわり方などにも気づく良い機会となり、共に育ち合える場となる。幼児も保護者から自分や友達の「よさ」を聞くことにより、今まで気づかなかった自分のよさや友達のよさを知ること、よりよい人間関係が育って行くものとする。

友達、保護者とフォークダンスをしたり触れ合うことで楽しい、嬉しい等、様々な感情や思いなどを保育参加の中で育てていきたい。

3 保育の目標

- ・自分や友達のよさに気づき、保護者と一緒に遊ぶ楽しさを味わう。

4 保育の視点

- ・自分や友達のよさに気づき、保護者と一緒に遊びが進められるような環境の工夫のあり方を探る。

5 保育実践の展開

幼児の姿	・生活発表会を友達と一緒に取り組み、やり遂げた喜びと自信を持って生活する姿がみられる。 ・生活発表会で友達に刺激をうけあたらしい遊びに挑戦する姿がみられる		
ねらい	・自分や友達のよさに気づき、保護者と一緒に遊ぶ楽しさを味わう	内容	・おかあさん好きなところを発表をする。 ・保護者から子どものよさを話す ・友達の発表や保護者の話を聞く ・友達、保護者とフォークダンスをして遊ぶ
時	◇予想される幼児の活動	○教師の援助 ★環境構成	
8:15	◇登園	・一人一人に挨拶を交わしながら健康状態を把握する ・出欠の確認をし、休みの連絡があった場合はその子の状況を伝え翌日、かわりがもてるようにする ・グループの場で話しを進める保護者と確認をとる ★全体で話しを聞く場を作る ○明るく元気に挨拶ができるように声かけをする ○保護者も一緒にきれいな、やさしい声で、歌をうたい温かい雰囲気をつくれるようにする ○今日の活動について確認をする。 ○おかあさんの好きなところを幼児が発表し、おかあさんから自分のよ	
8:45	・挨拶、所持品の整理をする		
9:30	・学級で話を聞く		
	◇全体で集まる（遊戯室）		
	・朝のあいさつをする		
	・みんなで歌おう（おかあさん）		
	◇話しを聞く		

	◇曲に合わせて場づくりをする (手のひらを太陽に) ◇各学級、グループごとに分かれる ・手遊びをする。(おてらのおしょうさん) ・最初に発表する幼児をカードをしてきめる ・おかあさんの好きなところを発表する ・保護者が幼児のよさを話す ・かごめ、かごめをする ◇全体で集まる ・全体の場所でもう一度おかあさんの好きなところを発表する。(1, 2人) 保護者も発表させる。(1, 2人) ◇フォークダンスをする	さを聞き、友達のよさにも気づくようにする ★各学級の話を進める保護者と場づくりをする ○各グループごとに保護者も入るよう言葉かけをする ○各グループがスムーズに話が進められるよう言葉かけをする ○話しを進める保護者にカードを準備しておく ○おかあさんの好きなところを発表できるようにする ○発表する幼児や保護者の話すことを聞き拍手をすることができるようにする ○保護者が参加できなかった幼児に配慮する ○友達や保護者と一緒にフォークダンスをすることで、遊ぶ楽しさを味わえるようにする ○みんなと楽しく遊んだことを感じとらせながら元気に挨拶ができるようにさせる
10:30	◇おわりの挨拶をする	
10:35	◇学級へもどる	保護者と楽しく花の苗を植える
評価	・自分や友だちのよさに気づき、保護者と遊ぶ楽しさを味わっていたか	



みんなで元気よくあいさつ



お父さん、お母さんも一緒にうれしいな



なごやかな話し合い



楽しくフォークダンス

V 研究全体の考察

- 1 日々の遊びの場面で幼児の表情やつぶやき、行動の様子から内面理解をすることを通して、人とかわる力が育つための援助のあり方を探る。

(1) A子の変容（友達とのかかわりで育っていく姿）

教師の援助

内面理解

4月、友達を相手にままごと遊びやごっこ遊びを楽しんでいる。しかし、自分の思いどおりに遊びを進めようとしたり、遊び道具の貸し借り等でトラブルが見られる。

家では、自分中心に過ごして来たのでおもしろくないのだろう。

そのつど双方の意見を聞き、相手の気持ちにも気付かせていくようにした。

6月、友達も園生活に慣れてくると、A子以外の友達とも遊びたいようだが、A子が他の遊びに行かさないようにする。

T教諭「どうしてそういうことするの。」と聞いても答えず

A子「じゃいいよ。」とそっけない態度をとる。

次第に友達が離れて行き淋しそうである。

友達は自分の思い通りに行かないということを感じているようだ。

友達の気持ちに気づかせるように援助した。

担任は、相手の気持ちも受け入れ楽しく遊べるようなリーダーシップを発揮できる幼児になってほしいと願っている。そこで、教頭の立場から、担任へ次のような指導を行った。

担任から日々のA子の様子を聞き、友達とのかかわりを見守りながら、A子が自分から気づくことを信じて温かく見守ることを助言した。

1月の保育参加の時、友達が2、3人いるよと友達の名前を喜んで話したり、すごろく遊びの中で、楽しく遊んでいる姿を見ることができた。

【考察】

担任の適切なかかわりや、友達との喧嘩や衝突などを通して、相手の思いを受け入れたり譲ったりをすることで、自己の存在感や他者への思いやりなどの社会性が育ってきた。

(2) B子の変容（周りに心を開いていく姿）

4月、新しい環境になじめず暗い表情で、笑顔もなく泣きながらの登園が続いた。また、降園時にも預かり保育に行きたがらず、泣き出してしまい、なかなか部屋を出ようとはしなかった。

教頭が落ち着くまで職員室で絵本を見たり話をしたりしながら、ほっとする雰囲気をつくってあげた。

自分から友達と関わることはできないが、周りの幼児はB子に話しかけたり、遊びに誘っている。

新しい友だちに興味・関心があるようだ。

「幼稚園では楽しい事がいっぱいあるよ。B子の楽しい事探し、してみよう」と一緒にパズルや折り紙をして遊び、その中に徐々に新しい友達を誘い入れていった。

6月中旬から安定し泣かなくなった。学級や預かり保育でも友達と誘い合って遊べるようになり、明るい表情が見られ、降園時もスムーズに挨拶ができるようになった。

10月中旬、自分から教頭にも家庭の話しをしてくれるようになり、12月の生活発表会ではみんなと楽しく劇ごっこをしている姿を見ることができた。

【考察】

友達がいない不安感を受け止め、担任との信頼関係を築いたり教頭が安定するまで見守ったことで緊張感を和らげることができたので自分から話しをしたり、友達とも仲良く遊ぶ楽しさが分かった。

2 保育参加の中で、家庭・地域の人々と触れ合い、人とのかかわる力が育つための環境の工夫のあり方を探る。

- (1) 保護者、地域の人々と一緒に遊びたくなるような環境の工夫（こま・お手玉・折り紙等の準備）をしたことで進んで身近な人とのかかわり、相手を受け入れたり、相手を認めたり相手の気持ちを汲んだりすることが出来た。
- (2) 触れ合い親しむために全体で集まって話を聞いたり歌を歌ったり、また、グループに分かれて発表したり、手遊び集団遊びなど環境の工夫をしたことで、友達や保護者と楽しく遊ぶ姿がみられた。
- (3) 地域の人々を招いて平和の話・綱曳の話を聞いたり実際に触れる等の環境の工夫をすることで集団生活における望ましい態度が見られた。
- (4) 保護者や地域の人々と交流する場合、活動の内容や友達の人数によって場や空間の位置の工夫をすることで楽しく過ごすことができた。
- (5) 地域の高齢者の人々との触れ合いを通して、優しさやいたわりの心が見られた。

【考察】

保育参加の中で、家庭・地域の人々と触れ合う環境の工夫をすることで、自分の感情や意志を表現したり、共に楽しみ共感する体験を通して、高齢者をはじめ地域の人々に親しみをもち、人とのかかわることの楽しさや人に役立つ喜びを味わうことができた。また、親の愛情に気づき親を大切にしようとする気持ちが育った。

VI 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- ・人とのかかわる力は容易に育つものではなく、幼児が日々の生活の中で幼児同士や地域の人々とのかかわる場面がいかに大切であることがわかった。
- ・幼児のつぶやきや表情、行動や内面の動きに気づくことの大切さや、幼児のありのままの姿を全面的に受け入れることで幼児との信頼関係が持てることがわかった。
- ・保育参加を通して親、地域の人々や高齢者を幼稚園に招き一緒に遊んだり、豊かな体験の話しを聞いたり、触れ合う活動、場を工夫することで、親子のかかわりや保護者同士のつながりも深まり幼稚園教育への関心も高まってきた。

2 今後の課題

- ・親子や地域の人々と楽しめるような保育参加の内容や持ち方を工夫していきたい。
- ・一人一人のよさや可能性を生かし人とのかかわりが持てる場や教師の援助、環境の工夫をさらに深めていきたい。
- ・保護者へ保育参加や講演会への呼びかけをすることで、幼稚園に気軽に来園し、いつでも子育てが語り合えるような開かれた幼稚園づくりを考えていきたい。

＜主な参考文献＞

文部省	『幼稚園教育要領解説』	フレーベル館	1999 年
柴崎正行・菊地明子 共編著	『保育のポイント』	フレーベル館	1993 年
具志川市市立教育研究所	『研究集録第9号ー1』		1995 年
那覇市立教育研究所	『紀要338号』		1996 年